

甘楽町は、1980年代から姉妹都市等との国際交流に取り組んできました。2001年、JICA海外協力隊の帰国隊員が、甘楽町にNPO法人自然塾寺子屋（自然塾寺子屋）を設立し、途上国研修員の受入れや協力隊訓練生の技術補完研修を開始したことで、途上国との交流機会が増えました。交流を通じて、研修員や協力隊員にとっては甘楽町が「第三の故郷」の様な存在となり、世界中に甘楽町の交流人口が増えています。

取り組み年表

- 地域独自の取り組み
- JICAとの連携事業
- 別機関の事業

1990 2000

2010

2020

1980年代- イタリア国チェルタルド市や中国ハルビン市等との相互訪問、研修生の受入れなど

● 2001 協力隊経験者が自然塾寺子屋を設立

→ 2002- 途上国からの研修員受入れ

2009- 自然塾寺子屋主催の田植え・稲刈りイベント（途上国研修員・協力隊訓練生も参加）

2003- JICA海外協力隊訓練生の技術補完研修、 2023- グローカルプログラム実習生の研修受入れ

→ ● 2008 甘楽富岡農村大学校（地域の有志農家ネットワーク）を設立、研修受入れを実施

2012-19 農林水産省の中南米日系農業者の交流事業

● 2012 「青年海外協力隊事業理解促進調査団」として町長がマラウイを訪問

● 2016 甘楽町が「JICAサポーター宣言」

→ ● 2020 「婦キャベ協力隊プロジェクト」

→ ● 2019 甘楽町がニカラグアのホストタウンとして登録される

● 2018 「青年研修フォローアップ、ニーズ調査、自治体連携事業案作成調査」で町長とNPO自然塾寺子屋がパラグアイ・パナマ訪問

→ ● 2023 「JICA海外協力隊自治体連携派遣に係る覚書」を締結

→ 2024-26 甘楽町職員を協力隊としてパラグアイに派遣中

地域の課題

○ 農業従事者の高齢化/担い手不足

地域のリソース

- 国際交流に積極的な風土
- 農業を軸にしたまちづくり
- 少量多品目で様々な野菜栽培技術が学べる

JICA海外協力隊派遣前訓練・海外研修員受入れを通じた訪問人口・交流人口の創出

甘楽町の国際交流

甘楽町の国際交流は、1980年代に姉妹都市のイタリア・チェルタルド市との交流からスタートし、子どもたちや青年使節団を相互に派遣し合ってきました。他にも、中国ハルビン市やニュージーランドなどとの交流を通じて、国際理解を深めてきました。

JICAの「研修※」受入れから広がる国際交流

2001年にJICA海外協力隊の帰国隊員が、「農業×国際協力」で地元群馬の地域づくりを目指し、その想いに共感を示した甘楽町で自然塾寺子屋が設立されました。以後、自然塾寺子屋を窓口として、甘楽町において、途上国研修員や協力隊訓練生の技術補完研修の受入れが開始されました。

途上国研修員の受入れでは、農業体験や流通・販売に関する調査を通じて、甘楽富岡地域の取り組みを学びます。また、甘楽町の農家へのホームステイや、甘楽中学校での給食体験・レクリエーションを通じた交流の時間があり、地元住民と途上国研修員が交流する貴重な機会となっています。

協力隊訓練生の技術補完研修やグローバルプログラム実習

生の受入れは、3週間～6ヶ月間程度の中長期間かけて実施されます。若者を受け入れ指導することは地元農家のやる気に繋がったり、協力隊訓練生を囲むために地域住民が集まるきっかけになり、地域に活力が出ています。また、「自分達が指導した協力隊訓練生を地域全体で途上国に送り出したい」という想いから、2008年に農家の有志ネットワーク「甘楽富岡農村大学校」が設立され、自然塾寺子屋と連携して研修員を受け入れています。近年では、研修員受入事業を通じた交流の縁から、東京2020オリンピックにおけるニカラグアのホストタウン登録に繋がったり、甘楽町職員のパラグアイへの協力隊派遣も始まりました。

また、2020年、COVID-19の大流行を受け緊急帰国した協力隊と、技能実習生が来日できず人手不足に困っている農家を、自然塾寺子屋が繋ぎ、両者がWin-Winとなるように課題解決を図った「婦キャベ海外協力隊」プロジェクトが実施されました。

JICAの「研修」の受入れを通じて、甘楽町の国際交流の輪が広がっています。

※JICA研修員受入事業とJICA海外協力隊派遣前訓練やプログラム等を総称し、「研修」と呼称

JICA国内拠点との協働	JICAからの出向者	国際協力推進員	多文化共生支援	元協力隊の関与
自治体連携協力隊派遣	途上国研修員の受入	協力隊派遣前訓練	草の根技術協力事業	民間連携事業
JICA技術協力との連携	開発教育	その他		

ケース 05 群馬県甘楽町

地域へのインパクト

地域住民の活力：農村大学校で協力隊訓練生を受け入れることで、地域の農家が集まる場や訓練生育成のモチベーションが生まれました。「よそ者」と共に活動することで、地域の方曰く「地域に新しい風」が吹きました。

地域のアイデンティティの強化：協力隊訓練生や途上国研修生との交流を通じ、自らの農業技術への気づき、甘楽町の良さの再発見に繋がりました。

新たな連携の創出：研修員受入事業を通じて、徐々に地域全体での受入れ態勢が整い、甘楽富岡農村大学校という有志ネットワークが設立され、町民による協力体制ができました。

国際対応力の向上：途上国研修員と子どもたちの交流は貴重な国際交流の場となっています。交流により、視野が広がり、海外への関心が高まりました。

知名度の向上：国際交流や国際協力に力を注ぐことで、町のイメージや知名度向上にも繋がっています。

訪問人口・交流人口の増加：協力隊の派遣前訓練では町に数ヶ月間滞在するため、甘楽町が第三の故郷のような存在となり、帰国後に交流人口として再訪する帰国隊員も多いです。

地域の担い手の増加：仲介者となる自然塾寺子屋があることで、帰国隊員数名が甘楽町に移住し、地域の担い手となりました。また、協力隊訓練生がいることで、一時的ながらも地域で不足する人手を補っています。

促進要因

国際交流に積極的な風土：甘楽町では国際交流がまちの計画に位置づけられており、歴代町長による深い理解もあり、国際協力を受け入れる素地がありました。

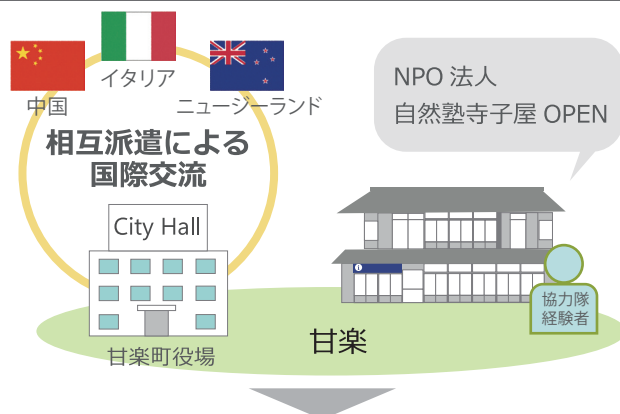
研修受入れにかかる組織間連携：「研修」の受入れにおいて、自然塾寺子屋が窓口となり、甘楽町役場、農村大学校を中心に、甘楽中学校も巻き込み、関係者間で連携体制が構築されていることでスムーズな受入れに繋がっています。

農家の有志組織による国際協力：農村大学校にて受入れの調整を行ない、農家が負担を感じることなく協力隊訓練生を受け入れられる様に調整しています。有志で楽しく交流することが継続に繋がっています。

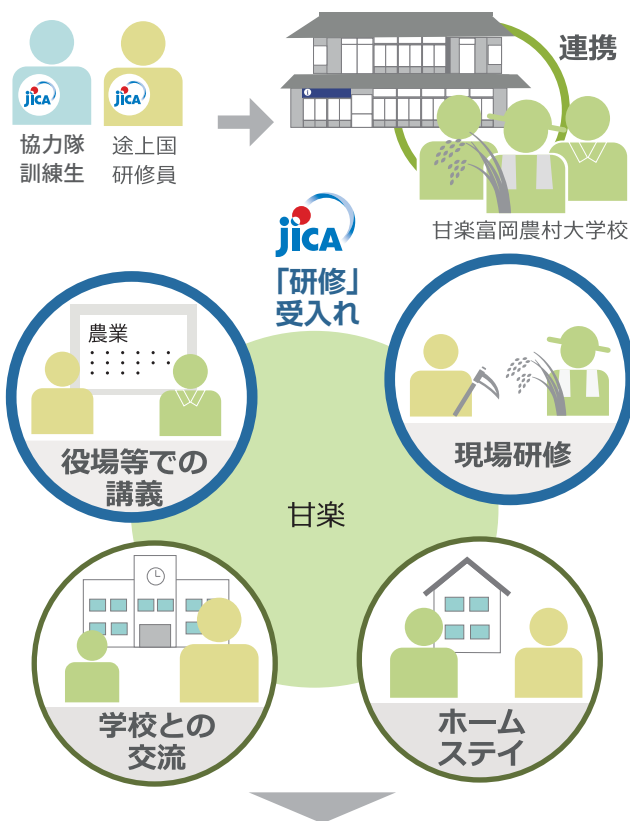
協力隊出身の「よそ者」の活躍：途上国を経験して広い視野を持った人材が活躍する自然塾寺子屋は、甘楽町の国際協力に必須の組織となっています。

地域住民との交流機会の設定：途上国研修員が、農家でのホームステイや、中学校での給食体験・交流をすることで、研修受入機関以外の地元住民と交流する機会が生まれ、地域内での国際協力に対する理解促進に繋がりました。

国際交流が盛んな甘楽町に、協力隊経験者が自然塾寺子屋を設立



JICA 研修を通じて町の国際交流が活性化



世界中に甘楽の交流人口が増加

